

I. ストラヴィンスキー：バレエ音楽《火の鳥》(1919年版)

イーゴリ・ストラヴィンスキー(1882～1971)作曲《火の鳥》は、もともとバレエ音楽として作曲されたものと、1911年版、1919年版、1945年版という三種の演奏会用組曲版が存在する。バレエ音楽は、セルゲイ・ディアギレフ(1872～1929)からの委嘱により、1910年春にロシア・バレエ団がおこなったパリ・オペラ座公演のために作曲された。

当時のロシアでは、オペラや交響楽作品こそが芸術音楽であり、バレエのための音楽は価値が低いものだと思われていた。しかしロシア・バレエ団を率いていたディアギレフは、その革新的な精神によって当時の芸術界に新風を吹き込み、バレエの地位をおおきく押し上げた。ディアギレフから作曲依頼を受けたとき、まだ無名な27歳の青年だったストラヴィンスキーは、バレエ《火の鳥》の成功によって一躍有名となる。そしてその成功が、《ペトルーシュカ》(1911)や《春の祭典》(1913)の作曲へとつながってゆく。

バレエ作品は、「ロシアのグリム兄弟」と称されるアレクサンドル・アフナーシェフ(1826～1871)が19世紀の後半に編纂したいくつかのロシア民話に題材をもとめている。台本を担当したロシア・バレエ団のミハイル・フォーキン(1880～1942)は、「イワン王子と火の鳥と灰色狼」や「不死身のコシチェイ」などの寓話をもとにしつつ、「火の鳥の羽」や「魔法のグースリ(スラブ民話に登場する複弦楽器)」など、ロシア民話でお馴染みの小道具もストーリーの随所にちりばめた。

帝政ロシア時代の「インテリゲンチヤ(知識人)」たちは、既存のアカデミズムに反発し、人間の生活を写實的に描いたレフ・トルストイ(1828～1910)の小説や、民話や民謡といったフォークロアに高い価値を見出していた。そうした当時の風潮が、《火の鳥》の題材にも反映されている。

バレエ版と1911年版では四管編成の大オーケストラが必要となるが、今夜演奏される1919年版は、「もっと頻繁にプログラムに載せられるように」と作曲者自身によって二管編成に編曲されたものである。もっとも、この編曲はストラヴィンスキーにとって満足のいくものとはならなかったようで、本人がこの作品を指揮する際には用いられなかった。しかし、コンパクトな構成で随所に華やかな効果があらわれるため、こんにちではもっとも頻繁に演奏会で取り上げられる人気の版となっている。

第1曲〈序奏〉では、弱音器を付けた低弦楽器が不気味な3連符の音型で舞台の幕開けを告げる。第2曲〈火の鳥の踊り〉と第3曲〈火の鳥のバリエーション〉は、ダイナミックながらも弦楽器の鋭い弓奏や短い休符が怪やかさを演出しており、バレエのプリマが演じる火の鳥の優雅さや存在感を示している。第4曲〈王女たちのホロヴォード(輪舞曲)〉は、牧歌的なメロディが独奏オーボエにはじまる。ホロヴォードはロシアに古くから伝わる踊りで、もとは異教徒の文化だったが、近世には若い男女の出会いの娯楽として定着していた。イワン王子と、魔王カスチェイに囚われた王女のうちの一人、ツアレヴナの出会いの場面にふさわしい。総奏による大音量の和音が空気を一変させると、第5曲〈魔王カスチェイの踊り〉の場となる。カスチェイの軍勢は主にファゴットやホルンなどの低音で表されるなか、ところどころハープとピアノのグリッサンドがまるでグースリのようにきらめく。この楽器は、民話においては英雄が敵を打ち負かす存在なのだ。第6曲〈子守唄〉でカスチェイたちが眠ってしまうと、第7曲〈フィナーレ〉で物語は華々しい幕引きをむかえる。